

# 13 産学連携で取り組む地域の魅力発信

## “若者・よそ者”視点を大切にした「まち歩きマップ」の制作

埼玉県・川越市など県内各地公体 | 武蔵野銀行

首都圏に位置するベッドタウンでありながら、江戸情緒ある町並みや、豊かな自然を観光資源として多くの来訪者を迎える埼玉県。そんな埼玉県各所の隠れたまちの魅力を伝えるため、地方銀行と地元学生がタッグを組んで「まち歩きマップ」を制作した。



### 埼玉県の概要

(人口) 7,338,696人 (2022年8月1日現在)

- 埼玉県は、首都圏の中央に位置し、東北・関東・圏央道をはじめとした6つの高速道路や、東北・上越など6つの新幹線により東日本の主要都市と結ばれるなど、全国屈指の「交通の要衝」として、多くの企業や人々を呼び込んでいる。
- 都市の賑わいと便利さを併せ持ちながら、荒川や利根川をはじめとする豊かな河川、秩父の美しい山並み、見沼田んぼや、武蔵野の雑木林などの豊かな自然も観光資源として持ち合わせる。
- 埼玉県は、晴天日が多く、気候条件にも恵まれていることから全国有数の農業県でもある。「深谷ねぎ」や「狭山茶」などの特産品は、品質の高いブランド農作物として広く知られている。



川越・蔵造りの町並み

### 立教大学との産学連携

2007年7月、武蔵野銀行は、埼玉県の地域活性化に貢献することを目的に、立教大学と産学連携協定を締結。同協定に基づく取り組みとして、埼玉県の観光活性化プロジェクト「埼玉 地域交流フットパスプロジェクト」を発足させた。

このプロジェクトでは、隠れたまちの魅力を発見する楽しさを提供するため、まち歩きマップ「ぶらってシリーズ」の制作を継続的に実施。これまでに以下のエリアを対象に制作を行っている。

発行年度	対象エリア	名称
2008年度	幸手市	ぶらって幸手
2009年度	羽生市	ぶらって羽生
2010年度	行田市	ぶらって行田
2011年度	加須市	ぶらって加須
2013年度	大宮氷川参道	ぶらって大宮氷川参道
2014年度	西武新宿線	ぶらって笑顔新聞 1
2015年度	西武池袋線	ぶらって笑顔新聞 2
	新座市・志木市	ぶらって笑顔新聞 3
2018年度	新座市	ぶらって新座
2019年度	秩父郡小鹿野町	ぶらって小鹿野
2020年度	秩父市	ぶらって秩父
2021年度	川越市	ぶらって川越
2021年度	秩父郡横瀬町	撮って巡って横瀬旅マップ



これまでに発行された「ぶらってシリーズ」(大宮氷川参道、行田、小鹿野)

### 「若者」「よそ者」視点で隠れた魅力を発信

まち歩きマップの制作にあたっては、埼玉県新座市にキャンパスを置く立教大学観光学部が、武蔵野銀行の協力の下、実際に対象エリアに何度も足を運んで現地調査を実施。隠れたまちの魅力や観光資源を発掘し、地域ごとにコンセプトやデザインを決めて編集している。学生は、地域活性化のために重要な「若者」「よそ者」の視点で掲載店舗や商品等を選定することで、地元住民であっても普段気づかないまちの魅力を発見・提供することができている。

まち歩きマップの冊子は、武蔵野銀行の本支店のほか、各エリアの市役所や観光案内所等で無料で配布しており、これまでに累計40万部以上が発行されるなど好評を博している。

### シリーズ10作目は、ぶらって川越を発刊



ぶらって川越

2021年度は、まち歩きマップとしては9作目、ぶらってシリーズとしては10作目となる「ぶらって川越」ステキな人々(ヒト)×歴史(トキ)感じるまちとの出逢い。」を発刊。

川越版は、「不易流行(いつまでも変化しない本質なものを忘れない中にも、新しく変化を重ねるものも取り入れていくことという意味)」をテーマとし、川越の歴史資源について、「時代が変わっても変わらず大切にしてきた要素」「時代に合わせた要素」を学生の視点で見出し、「川越の『継承と創造の歴史』を伝え、未来につなげる観光」を提案している。

マップは市内を巡る4コースを紹介。カフェや庭園など写真映えるスポットを巡るコースや、日本史好きの学生が考案したコースなどを盛り込んだ。また、川越市は都内に近く日帰り観光客が多いことが課題となっているため、話題の宿泊施設やモーニングも紹介している。

マップは市内を巡る4コースを紹介。カフェや庭園など写真映えるスポットを巡るコースや、日本史好きの学生が考案したコースなどを盛り込んだ。また、川越市は都内に近く日帰り観光客が多いことが課題となっているため、話題の宿泊施設やモーニングも紹介している。

### Column

#### 小江戸・川越における美しい町並みの持続的保存方法(埼玉県川越市)

埼玉県川越市は、江戸を守る要衝として、江戸との物流とともに、その文化を吸収して発展。現在では、蔵造りの町並みにより江戸の風情を今に伝える「小江戸」として知られるが、町並みの保存は地域住民が主体となって取り組んでいる。



町並み委員会の様子

戦後の都市化の影響による町並みの変化に対し、昭和40年代後半から蔵造りの建物や町並みを保存しようとする動きが始動。昭和58年(1983年)には、住民主体のまちづくりや商店街活性化による景観保存を目的とした市民団体「川越蔵の会」(現在はNPO団体)が発足。昭和62年(1987年)には、川越一番街商業協同組合の諮問機関として、町並み保存のための自主的協議組織「川越町並み委員会」が設置。この「川越町並み委員会」は、現在も月に1回例会を開催し、建物の新築・増改築・修理などの際には、「町づくり規範」に基づく協議・助言を行い、住民主体の町並み保存に大きな役割を果たしている。

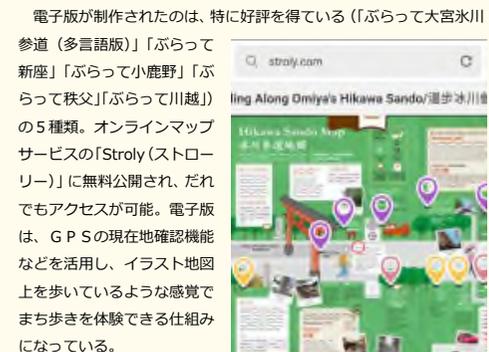
「町づくり規範」は、川越町並み委員会設置の翌年に制定された町づくりに関するルールであり、町づくりの基本目標として「商業活動の活性化による経済基盤の確立」「現代にふさわしい居住環境の形成と豊かな生活文化の創造」「地域

### 待望の電子版「まち歩きMAP」も発行



県内各地でまち歩きマップが活用されるなか、「スマートフォンやタブレットで本マップを閲覧したい」との要望が多く寄せられたことから、2020年度からは電子版「まち歩きMAP」も制作されている。

電子版が制作されたのは、特に好評を得ている(「ぶらって大宮氷川参道(多言語版)」「ぶらって新座」「ぶらって小鹿野」「ぶらって秩父」「ぶらって川越」)の5種類。オンラインマップサービスの「Stroly(ストロリー)」に無料公開され、だれでもアクセスが可能。電子版は、GPSの現在地確認機能などを活用し、イラスト地図



まち歩きMAP閲覧イメージ(スマホ)「ぶらって大宮氷川参道(多言語版)」

固有でしかも人類共有の財産としての価値を持つ歴史的町並みの保存と継承の三つを掲げ、都市・建築に関する規範について67項目にも及ぶ原則が記載されている。

しかし、この「町づくり規範」は、規制や取り締まりのために制定されたものではなく、自主協定として住まい方の原則をパターン化したもので、住民の創意工夫を促すように弾力的な運用が可能な内容となっている。例えば、高さ制限については「3階が限度の範囲内で周辺とのバランスをとる必要がある。周辺の建物と2階以上の差を付けないようにすればよい。」との記載があり、こうした原則に基づいて住民が個々に最適解を探ることになる。

平成11年(1999年)に川越市の一部が伝統的建造物群保存地区として指定され、地区内の建物を変更する際には条例に基づき申請が必要になったが、川越町並み委員会は、その審査に先立って審議を行い、委員会の意見はその後の審査においても尊重されている。

こうした、住民主体の町づくりの過程は、地域の知恵として蓄積され、現在の美しい町並みの保全に繋がっている。



町づくり規範